

やまとの名品 天理図書館



菅紙のうしろ判
 菅原氏也このまじりて布調へて紙中紙末
 雷園舟を紙をくも包し高賣の道とてとてと
 春日の里舟秤用とてとてとてとてとてとてと
 是くまよふ若草山のちちりて詠書くはひり
 うらりりの飛火野いり飛月とてとてとてとて
 惜しむも甚だ八卯月十三鐘のしりて
 是く舟敷を今を藤之河勢一人公吉種とてとて
 大がえんまるとも人におとくもはるく山と山
 野父とてとてとてとてとてとてとてとてとて
 う紙桃のちねいりて色ゆもてとてとてとてとて

こうしやくいちだいのとこ 好色一代男

井原西鶴著

大坂 荒砥屋孫兵衛可心

天和2年(1682)刊 8巻8冊

縦26.5cm 横18cm

『好色一代男』は、江戸時代の文豪・井原西鶴（一六四二〜一六九三）が初めて書いた小説で、主人公世之介の七歳から六十歳に及ぶ好色遍歴の一代記です。本作品の登場により、浮世草子という新たなジャンルが生まれました。

掲出の箇所は、奈良市の旧市街地である奈良町が舞台です。世之介十七歳の時、見習いのため、当時奈良町の主要産業である「奈良晒（麻布）」を商う問屋へ遣わされました。しかし世之介は、商売には見向きもせず、当時隆盛であった木辻町の遊郭にて、昔なじみの遊女と再会し、懇ろとなりました。やがて二人

は、心変わりがないよう誓紙を取り交わし、愛を誓い合うという内容です。

また西鶴は、画家としても才能があり、挿絵も自ら描いたとされま

す。世之介が、奈良町を象徴する鹿を指さし、若草山の麓で野がけを楽しんでいる図は、本文にそのシーンはありませんが、「観光都市」奈良町の情景を表現したかったのでしょうか。

木辻遊郭の風情、晒の商い方



東大寺南大門付近の晒場。「奈良晒」は、天日に晒して漂白することにより、高品質を保った。（『寧楽清勝絵巻』より）

法および観光名所を巧みに織り交せて、奈良町の様子が軽妙洒脱に描かれています。まさに西鶴の多才ぶりをうかがい知ることができる書ではないでしょうか。

（天理図書館 佐上圭太）